The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	竹内楊園編『嚶鳴集』について
Author(s)	鷲原, 知良
Citation	語文, 84-85, p. 119-128
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

竹内楊園編『嚶鳴集』について

鷲原知良

一

近世後期の漢詩選集には、たとえば市河寛斎、柏木如亭、大窪詩仏、菊池五山の詩を収める『今四家絶句』（梁川星巌等編集、文化十二年、一八一五刊）のように当時一級の有名詩人の作品を集めたものに対し、文学史に名を留めない無名の詩人の作を含め広く集めたものも多く存する。その収録範囲の広さにより、後者の選集の方がむしろ前者の選集よりも当時の詩壇の状況をよく伝える資料となる場合がある。稿者もこれまでに文化文政年間の『近人小詩』、『今人詩英』や嘉永安政年間の『同人集』、また万延文久年間の『近世名家詩鈔』、『近世詩林』について考察したことがある。[1]

本稿では安政年間末から幕末にかけて刊行された竹内楊園編『嚶鳴集』について同様の視点から考察する。『嚶鳴集』は安政六年（一八五九）の初編を嚆矢として、慶応三年の第九集に至るまで全十冊（第六集のみ二冊）が上梓された。[2] 見返し及び柱題には、最初の一冊が「嚶鳴集初編」、以下の九冊は「嚶鳴第〇集」と刻されているので、以下この標題に従い記述する。見返しの刊記によると、それぞれの冊の刊行年次は以下の通りである。

安政六年（一八五九）夏　初編
万延元年（一八六〇）七月　二集・三集（見返しは二冊共通）
文久元年（一八六一）七月　四集・五集（同板の見返し）
慶応元年（一八六五）十月　六集（丁の数字は通番）
慶応二年（一八六六）九月　七集・八集（見返しは二冊共通）
慶応三年（一八六七）七月　九集

二・三、四・五、七・八集はそれぞれ同時に刊行されているから、実質的には全六編であるが、それでも計三編六冊が刊行された大沼枕山編の『同人集』を凌ぎ、近世後期の漢詩選集の中でも『嚶鳴集』が最も大部のものの一つであったと思われる。

『嚶鳴集』とその編者竹内楊園について、従来の文学史は殆ど

言及してこなかったと言ってよい。『日本古典文学大辞典』（一九八三～五年、岩波書店）、近藤春雄『日本漢文学大事典』（一九八五年、明治書院）等にも、楊園及び『嚶鳴集』に関する一片の記述も見られない。しかし、ようやく比較的近年に至り郷土史の面から楊園についての詳しい研究が発表された。石丸和雄氏の「竹内楊園について」（「伊予史談」288～290号、一九九三年一・四・七月）である。まことに精力的な研究であり、稿者は楊園の伝記に関して現時点でこれに付け加えるべき材料を持たない。ただ、石丸氏の論考は楊園の評伝を主体としているため、『嚶鳴集』の解説については若干補って指摘すべき事項もあると思われる。本稿では以下その点を中心に述べたい。

まず、竹内楊園の事績について、石丸氏の論考に拠りつつ略述しておく。文政十一年（一八二八）頃（石丸氏による推定で一、二年の誤差がありえるという）に伊予西条に生まれた楊園は、十二歳前後で江戸へ出て林家に学び、やがて食客として関東各地を遊歴した後、河内丹南藩儒に迎えられる。丹南藩は関東に領地を有していたので、楊園は主に江戸に住み詩壇にも名を馳せ『嚶鳴集』を陸続と板行した。その後、藩儒を辞して浪人の身となり、慶応三年に至って越後椎谷藩に召されるが、明治元年、彰義隊に連座したことにより斬殺され、四十一歳の生涯を終えたという。この楊園の終焉については依田学海の『学海日録』の記事により知られる所である。

楊園の『嚶鳴集』以外の編著には、『東毛復讐始末』、『西省集』、『今英霊集』などがあるが、楊園個人の詩集は、伊予帰省の折の作をまとめた『西省集』のみである。石丸氏は、幕末期の他の漢詩選集の類に楊園の詩が見られないこととも併せて、漢詩実作者としての詩壇での地位は低かったかと推察しているが、いずれにせよ楊園の最大の事績が『嚶鳴集』の編集であったことは間違いない。

二

さて、稿者はこれまで『同人集』等の近世後期の漢詩選集について、収録される詩体に注目して考察を重ねてきた。すなわち、七言絶句等の近体詩に限定せず、長編の詩をも成し得る古体詩が含まれているか否かが、選集の性格を捉える際に一つの重要な指標となるというものである。もちろん古体詩が必ずしも近体詩より優れるということではないが、有名有力詩人は各々長短はあれ、古体も近体も成し得るのに対し、七絶等の近体のみしか作る力のない詩人も多く存在するのが、この時期の詩壇の実況であったからである。

以下、『嚶鳴集』についても同様に収録作品の詩体に関して考察したい。石丸氏は、『嚶鳴集』第二集以後においては、古賀精里、菊池五山、篠崎松竹、中島棕隠など物故詩人の作品を収録しなくなったことを指摘している。

『嚶鳴第二集』以後においては物故詩人の作品を利用しなくなり、また当代有名詩人の作品の掲載も減少して、もっぱら

楊園と交流する範囲内の先輩知人門弟の作を主とするようになっていることは、「嚶鳴」の本義にかなったものといえよう。（「伊予史談」289号）

『詩経』小雅の「伐木」に拠り交友の意を示す「嚶鳴」の語を冠した標題に、二集以後はより適った詩集になったというのである。この初編から二集への変化に加えて、第二集以後では古体詩が収録されるようになったことにも注意するべきであろう。第二集に添えられた楊園の例言には以下のようにある。

去年、既に初集を刊す。軽挙鹵莽、臍を噬むも及ばず。因て今、第二第三集を刊するに、大沼枕山、鷲津毅堂に請ひて之を正す。庶幾くは、前日の失を免れんことを。更に圏点を加へて以て読者の心目を豁く。亦二兄の力なり。（原漢文）

これにより、二集三集では『嚶鳴集』編集の際に、大沼枕山（一八一八～一八九一）と鷲津毅堂（一八二五～一八八二）の二家の助力があったことがわかる。枕山と毅堂は従兄弟関係にあり、両者の評伝は永井荷風の『下谷叢話』に詳しい。両者ともに『嚶鳴集』二集と同じく万延元年刊行の植村蘆洲・真下晩菘編『六名家詩鈔』に一巻を充てて作品が収められ、当時の漢詩壇を代表する詩人であった。枕山が特に古体を重視した詩人であることは定評であり、毅堂もまた『六名家詩鈔』に少なからぬ割合で古体詩を選ばれている。したがって『嚶鳴集』に古体が収録されるようになったことにも、二家に影響された部分があると考えられるのである。『嚶鳴集』に寄せられた序跋や題詞等の一覧は以下の通りであるが、これを見ても枕山と毅堂が深く関わっていることが確認できる。

初集〈序〉堤静斉　〈跋〉鷲津毅堂
二集〈序〉大沼枕山・小橋橘陰　〈跋〉依田学海
三集〈序〉鷲津毅堂・川田劉
四集〈序〉大槻磐渓・三島桐南　〈題詞〉川田甕江・堤静斉
　〈跋〉八木南台
五集〈序〉佐藤牧山・春田九皐　〈跋〉長谷川昆渓
六集〈序〉大沼枕山・小林畏堂
　〈題詞〉鷲津毅堂・佐藤牧山・植村蘆洲・赤松玄民
　・小橋橘陰・中田鷗隣　〈跋〉棚谷鳳陽
七集〈序〉菊池三渓
　〈題詞〉大沼枕山・中村湘東・関雪江・棚谷鳳陽
八集〈序〉佐藤牧山・小南嶺南
　〈題詞〉長谷川昆渓・松田聴松・鈴木松塘
九集〈序〉大沼枕山
　〈題詞〉佐藤牧山・小林畏堂・服部随庵・関雪江
　・村井楽所・菊池三渓・植村蘆洲

また、『嚶鳴集』第二集には「増刻」部分があるが、ここに含まれる七家十三首のうち三首が古体である。さらに、後に掲げる一覧に見られるように『嚶鳴集』では、詩集の顔とも言うべき巻頭の詩家の作に古体詩が置かれることが多く、二集以後では五集を除くすべての冊の第一作が古体詩となっている。これらの点か

らも第二集から採録するようになった古体詩を重視する傾向がうかがわれるのである。

『嚶鳴集』全九集には、序跋における題詞等を除いた本文部分に限ると、延べ八百七十九名の詩人の千四百二十八首が収められている。なお、複数の集に重ねて収録される詩人もあるので、実際の収録詩家数は六百七十九名になる。[3] そのうち古体詩を採られる詩人の数は六十六名で、詩篇の合計数は八十五首である。これらの数字は、以前に考察した大沼枕山の『同人集』が千百七十三首のうち六十首が古体であるのとほぼ同じ割合であり、約二十首に一首が古体という計算になる。（『同人集』約五・一％『嚶鳴集』約六・〇％）また、古体を採られる詩家の全体に占める割合も、四百九十七名のうち五十一名の『同人集』と近く、ほぼ十人に一人である。（『同人集』約一〇・三％『嚶鳴集』約九・七％）『嚶鳴集』初編が古体を収めないことを勘案すると、二集以後の『嚶鳴集』方が若干高い割合で古体を収めているといえよう。

結局の所、古体詩を製作する力量を備えた詩人というのは、ある程度限られており、同じように有名無名の詩家を多数収録する『同人集』と『嚶鳴集』が古体詩の割合において近似した値を示すのは、むしろ自然な結果であるのかもしれない。ただ、枕山等が楊園の『嚶鳴集』編集に助力した結果として、その詩人の作品に古体詩のある場合は積極的にそれを採録しようという姿勢があったのではなかろうか。

三

以下は『嚶鳴集』に収録される古体詩の一覧である。このうち枕山の『同人集』と共通して古体詩を採られる詩人は、鈴木松塘、鷲津毅堂、大槻磐渓、佐藤牧山、植村盧洲、長谷川昆渓、関雪江、横山湖山の八名である。いずれも、個人の詩集を刊行する程度に詩人として後世に名を遺しており、先後輩もしくは門人として枕山と何らかの関わりがあった人物である。このことも『嚶鳴集』編集への枕山の影響を示唆していよう。

『嚶鳴集』古体詩一覧

○印は巻頭の詩人（六集の加藤霞石は二冊目）
●印は『同人集』にも古体詩を採録される詩人

二集

○斎藤拙堂　寄題大石氏故宅桜花・七古
庄原篁墩　甲越歌・七古
高井鴻山　七月十五日詣祥雲寺展墓有感・七古
鈴木蓼処　過新田左将公戦没処感而有作・七古
鈴木松塘●　同子闇牡丹花下分韻賦詩適高木抑斎携酒至遂大醉子闇醉中詩先成醉後時其韻・七古
川田甕江　題銀猫投児図・七古
鷲津毅堂●　梅鶴高士図・七古
釈　密乗　謝人贈檳榔石・七古

釈　清泉　鶯児歌贈祖牛道人・七古
不破不言　春柳・七古
赤松桐陰　閏七月望同鼎斎先生及諸子墨水賞月遂飲川口楼得墨字・五古
浅田栗園　蒙古入冦図・七古

三集

○大槻磐渓●　趙雲・七古
三島桐南　鉄鉉瞰已肉図・七古
後藤松陰　読書有感・五古
星野洵堂　神辺駅過廉塾・七古
広瀬旭荘　池立馬市・七古
小原鉄心　雑言二首・五古
富田鷗処　囚虜詠梅図・七古
斎藤誠軒　繰糸詞・七古
平井澹斎　丹霞山歌送青木惟高帰省南予・七古
頼　支峰　観先君子画横空盤硬図・七古
保岡近仙　韓世忠騎驢図・七古
佐田水竹　松本先生墓下作・七古
嵩　春斎　展寒緑松本先生墓有作次佐田脩平韻・七古
森　春濤　除夕戯作・七古
横山徳渓　名和公・七古
柴田肇庵　贈千葉曲江・七古
小橋橘陰　寒夜偶感・五古
山崎桃蹊　春霖・五古

四集

○佐藤牧山●　渡矢口川・七古
宮原蒼雪　桜化石・七古
植村蘆洲●　猩猩図・七古
余語桜軒　猿捉月図・七古
巌井白湾　碓氷嶺・七古
巌井孜堂　読六臣伝・七古
巌井皷山　紀屠者殺伶優事・五古
沢田静脩　寄松祝執政熊崎翁七十及其婦人六十寿・七古
稲波蘭苑　夜坐・五古
長谷川昆渓●　開春記事・七古
三島桐南　撼山易・七古
釈　了英　我有美酒行・七古
釈　純剛　打水詞・七古
高井鴻山　殺蠅菌・七古
高井鴻山　好頭頸擬古楽府・七古
関　雪江●　八雲琴歌贈能連師・七古

五集

加藤掬靄　題所蔵小予山石・五古
平井東堂　咏虎・七古
本沢虚堂　起苗泉・七古
依田学海　箭口津謁新田神君祠・五古

馬島杏雨　買梅・五古
小橋橋陰　観磐渓翠厓合作山水図歌・七古
釈　密乗　謝蘭畹贈藜杖・五古

六集

○菊池三渓　苦吟十韻・五古
横山湖山●　題群盲評古器図・七古
落合竜知　出塞・五古
佐藤牧山●　観谷文晁画竜図引・七古
山田梅東　儀衛恭紀六韻詩・五古
吉田東海　題東岳画酔軒道人納涼図・七古
○加藤霞石　余曽獲一奇石於里中之予山以其形似焉命曰小予山賦古風一篇以記之・五古
加藤殿峰　山水歌簡春木南溟翁兼賀七十一・七古

七集

○植村蘆洲●　千年蓋歌・七古
遠田種菜　開爐話旧・五古
遠田種菜　題雪夜徴行図・七古
田　小舟　子房捧履図・七古
佐藤蕉廬　詠史・五古
佐藤蕉廬　和淵明飲酒・五古
大槻泰嶺　甲子歳紀事・七古
巌本琴城　酔後記感・五古

八集

○鈴木松塘●　備後三郎題詩桜樹図・七古
巌本琴城　題項王泣虞図・五古
棚谷善庵　読史偶感・七古
松下松陰　望海作・七古
松下松陰　咏史・七古
小島晋斎　題林院読書図・七古
湯川奎州　有人・五古

九集

○田　小舟　江都震・七古
棚谷善庵　観太神楽歌・七古
横山湖山●　題竜虎二図同高津菁斎高井鴻山作・七古
松下松陰　二竜争玉図・七古
松下松陰　夢与英国船戦・七古
大槻磐渓●　或読此詩有異議因取其意更作一篇・五古
赤松桐陰　送田中求三帰信州・五古
北沢冠岳　到芸洲途中時元治紀元臘月・五古

さて、『嚶鳴集』収録の古体詩について見ると、詠史や題画の作が比較的多いようである。これは当時の古体詩の題材として一般的な傾向に沿っているといえよう。また、諸国巷間の風物を詠じるに事寄せて時弊を諷する、白居易の新楽府等に倣う古体詩も散見される。東海道知鯉鮒宿の馬市を詠じた広瀬旭荘の「池立馬市」（二集）、信州小布施の毒茸を詠じた高井鴻山の「殺蠅菌」（四集）、旱害を救った湧泉を詠じた本沢虚堂の「起苗泉」（五集）

等である。

後者のような題材が大沼枕山の作風の特徴の一つであることは、以前に考察したことがある。[4] その点から、七集の巻頭に所収の植村蘆洲「千年蓝歌」は興味深い作品といえる。「千年蓝」は万年青の別称であり、幕末期江戸市中の民に甚だ賞翫され利殖の手段ともなったため、嘉永年間には禁令が出たほどであった。枕山はこのことを三十四句の七言古詩に詠じている。

昨日官家俄に令を下す
其の尤なる者を罪して価太だ軽し
富家望を失ひ諸市に売る
花戸色沮して品評を厭ふ
昨日貴重なるに今日賤し
覆雨翻雲は世上の情なり
（『枕山詩鈔二編』上、第二十五～三十句）

蘆洲は枕山の門人の中で最も大成した詩人の一人であり、天保元年（一八三〇）生まれで楊園とは同世代である。前述の『六名家詩鈔』の編集にも加わり、文久二年（一八六二）には自作四百首余りを収める『蘆洲詩鈔』三巻も刊行している。その蘆洲が『嚶鳴集』に寄せた「千年蓝歌」は枕山と同じく三十四句の七言古詩である。同じ韻は用いていないが、おそらく蘆洲は枕山の詩を踏まえて詠じた可能性が高い。

丹実金と化し貧は福に転ず
片葉誰か瞋せん百鎰の鬻
龍断独り私す種樹の翁
奇貨多く居く朽貫の屋
国を富するに術無く腐儒は常に貧し
芸葉の蠹長く櫝に蔵す
（第二十九～三十四句）

この蘆洲の詩を『嚶鳴集』に入れるに際して枕山の関与があったことを証する資料は見出しえないが、少なくとも間接的な影響は認められよう。枕山自身の作は『嚶鳴集』三集以後は本文に現れず、題詞の詩のみを寄せている。自らは既に詩壇の一盟主として『嚶鳴集』のような選集への掲載については一歩引き、蘆洲等の後生に託する姿勢であったともうかがえないであろうか。後に述べるように『嚶鳴集』には無名詩人が刊行の出資者となり自らの詩を掲載する側面もあるが、一方では読者の興味を得る作品を掲載して、詩集としての平衡をとる必要もあったであろう。その意味から蘆洲ほどの格の詩人には、ある程度の重みを持った作品が求められたのではなかろうか。「千年蓝歌」はその端的な例と目されるのである。

四

次に無名詩人の作品の収録に関する事例から、『嚶鳴集』の性格について考察してみる。『嚶鳴集』はすべて「臥雲楼蔵版」、すなわち楊園の私家版の形で刊行された詩集である。[5] これは石丸氏の推察によると、収録された詩家からの出資で採算がとれたため

であろうとのことである。

田舎の無名詩人たちはいくら作詩に励んでもその作品が印刷されて公刊される機会は絶無といってもよい。ところが、楊園の傘下に入れば、江戸で発行される立派な詩集の中に己れの作品がおさまるのであって、定めし名誉あることと受け取られていたのだろう。（「伊予史談」289号）

こうした『嚶鳴集』の性格は、詩集と詩話という形態の違いこそあれ、文化文政期に菊池五山が陸続と刊行した『五山堂詩話』と似通うものである。無名詩人の作を『五山堂詩話』に取り上げる際に、五山が相応の「入集料」を作者から得ていたことは、揖斐高氏の一連の研究で明らかにされている。[6]

稿者も別の点で、『嚶鳴集』が『五山堂詩話』と同様の性格を示している事例を指摘しておきたい。揖斐高氏は「化政期詩壇と批評家―『五山堂詩話』論―」（「文学」一九七五年七月号）において、以下のように述べている。

このケース（投稿）の中で目につくのは、物故した詩人の詩を友人縁者などが追福のために五山に採用を依頼した例である。おそらく、それは遺稿集を刊行するほどの詩人ではなく、またその資力もないという場合だが、『詩話』の巻六あたりから次第に多く見られるようになる。こうしたケースは『詩話』の権威が詩壇において確立されていった過程と平行して増加しているように思われる。（括弧内稿者注）

具体的には、『五山堂詩話』の以下のような記事が該当しよう。

山本清渓、一詩冊を投示して曰く、「亡姪、名は正剛、字は士毅、筠渓と号す。幼より詩を嗜み、蕪詞堆を成す。中年下世し詩多く散失す。其の存する者僅僅此に止る。一片の心血、吾、埋没するに忍びず。先生、幸に為に之を存せよ」と。余、其を録す。（巻六、原漢文）

履斎来たりて其の亡友小田生の詩を示して曰く、「生、名は邦之、瀑山と号す。勢の釜生田の人。零丁孤苦し郷を去りて都下某の商家に給事す。清謹力を竭す。少間には則ち端座して書を読み、又来たりて贄を吾が善庵先生に執る。既にして自ら謂らく、『吾が先は士たり。我、商と為ることを恥づ』と。幡然として業を改め、文芸を以て自ら奮はんと欲す。嗟哉、生、而立に二を少くるに病んで客舎に死す。実に今歳十一月十四日なり。筐中遺す所、詩文若干篇、別に雑記一巻有り。其の中、自戒の語多く、是れ以て其の人となりを見るに足るなり。充（履斎）、其の志を悲しみ、又草亡木卒を惜しむ。幸いに此の詩を収むるを見る。長く姓名を留むれば、則ち以て一片の石に当つべし」と。余、特に履斎の山陽の情に深きを嘉し、即ち其の請に因て之を録す。（巻七、原漢文、括弧内稿者注）

そして、『嚶鳴集』第三集に「附録」として収載された山崎桃蹊の詩が、これと同様のケースに当たる。

余、既に此の集を刻するに友人黒田子友書を寄せて曰く、「吾が友、武陵の山崎翁[7]、国学を以て世に鳴る。其の子、子

温、天質温厚にして頗る俊才有り。好く書を読み、又画を善くす。嘗て余に従ひて遊び、余、之に勧めて詩を作らしむ。子温、乃ち昕朝夕詩に従事し、才藻日進す。余、其の他日成立有らんを望むなり。而して去歳、安政戊午冬病没す。年十七なり。嗚呼苗にして秀でざること哀れなる哉。翁、泣きて余に謂て曰く、『我が児、不幸にして早没し、以て世に顕る無し。幸い詩数十首有り。若し風を采る有らば、収録し以て不朽に伝ふを得ん。亦以て我が悲を慰むに足れり』と。余、之を諾し、其の尤なる者若干首を撰し以て後つ。頃、聞く足下嚶鳴集を撰するを。若し此の詩を以て巻に附するを賜らば、唯に翁の喜のみならず、亦、余の喜なり」と。余、既に子友の囑を重んじ、又、子温の才にして早夭するを傷み、義、背くに忍びず。故に之を後に附すると云ふ。(原漢文)

知友を介して夭折した詩人の遺作にめぐり会ったという措辞も、あたかも『五山堂詩話』の顰みに倣おうとするかのようである。夙に石丸氏も指摘するように、『嚶鳴集』は清人兪曲園の『東瀛詩選』の選定資料に用いられた。『東瀛詩選』は、近代の新聞・出版事業の先駆者である岸田吟香が、日本漢詩を中国に紹介する目的で蘇州の兪曲園に日本人の漢詩集を届け選定を依頼したもので、明治十六年(一八八三)頃(清朝の光緒九年)に成立、清版が刊行された。[8]『東瀛詩選』には出処の詩集が明記されているので、その中に『嚶鳴集』と後印の『今世名家詩選』も含まれていたことがわかる。これら楊園編の選集から『東瀛詩選』には九十九人の詩人の百三十首が選ばれている。ちなみに、そのうち十六首が古体詩である。『嚶鳴集』の全詩篇からおよそ一割の詩が選ばれているが、古体詩に関しては二割近くが選ばれていることになる。もとより、兪曲園の選定が詩篇の評価の唯一絶対的な基準ではありえないが、中国の碩学の鑑識眼においても古体詩への評価が高かったことを示すものといえよう。

『東瀛詩選』が名家大家の作のみでなく、広く日本の詩人の詠を収める詩集と成り得たのには『嚶鳴集』に拠るところが大きかったと考えられる。右の山崎桃蹊の詩は、『嚶鳴集』に古体一首を含む計二十首が収められ、うち七首が『東瀛詩選』に選ばれている。ただし曲園は桃蹊の古体は採っていない。

しかし、『嚶鳴集』の存在なくしては、このように別集の刊行されないレベルの詩人の多くは、名前さえ記録されないまま埋もれてしまったことは事実であり、そのことのみをもっても、楊園が『嚶鳴集』を編集刊行したことは、重要かつ看過すべきでない。冒頭で述べたように『嚶鳴集』は従来の文学史において全く顧みられず、漢詩文研究者でさえも言及することは殆ど無かった書物である。向後の近世後期漢詩研究においては、楊園研究に関する石丸氏の功績を踏まえて、幕末漢詩壇の状況における『嚶鳴集』の存在を適正に評価する必要があることを再度確認しておきたい。本稿で『五山堂詩話』や『同人集』など先行して刊行された漢詩関係の書物と関連して『嚶鳴集』を考察したことが、その一階梯となるべく、さらに同時期の選集類を含めた精査を進めたい。

古書院）の佐野正巳氏の解題に詳しく記される。

—佛教大学非常勤講師—

注

（1）それぞれ拙稿「『五山堂詩話』と化政期の漢詩選集」（『江戸文学』24　二〇〇一年一一月）、「大沼枕山選評『同人集』について」（『和漢比較文学』16　一九九六年二月）、「万延二年（文久元年）刊『近世名家詩鈔』と『近世詩林』について」（『上方文藝研究』2　二〇〇五年五月）

（2）『嚶鳴集』には、「増刻」、「附録」等と記して収録詩を追加した冊がある。たとえば、大阪大学附属図書館蔵本では「甲本」には増補部分がなく、「乙本」にはある。他の機関の所蔵本も管見の限り増補部分の有無による二種類に別れるようである。本稿では増補後の本を考察対象とする。なお、『嚶鳴集』六～九集の板木を流用した『今世名家詩選』四巻が明治期に入って刊行されている。

（3）石丸氏の論文には七百三十四名（延べ九百十七名）とあるが、これは第九集末尾の人名総覧により、序跋者や画人書家も含めて数えたためであろう。あるいは増補部分の算入に関して誤差が生じているかもしれない。

（4）拙稿「江戸後期の日本漢詩における白居易受容—大沼枕山・村上仏山を中心に—」（『日本文化學報』14　二〇〇二年）

（5）後印の『今世名家詩選』は「東京日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛」ほか東京、大阪、京都三府の書肆十軒の名を奥付に記す。日付や「官許」等の文字は刻されていない。

（6）『日本詩史　五山堂詩話』（新日本古典文学大系65　一九九一年、岩波書店）の揖斐高氏の解説に詳しく記される。

（7）石丸氏はこの「武陵山崎翁」を山崎美成かと推察するが、美成の没年安政三年を文久と錯誤しており、美成は桃蹊の没した安政戊午（五年）より先に没しているので、この説には首肯しがたい。

（8）『東瀛詩選』の成立については、『東瀛詩選』（一九八一年、汲